

文化財センター通信

【かざぐるま】

風 車

第 21 号



紀州の歴史と文化の風

財団法人 和歌山県文化財センター

連続特集

重要文化財 福勝寺 その4

調査によってわかった事柄から
福勝寺の建物はかつての姿に復原されます

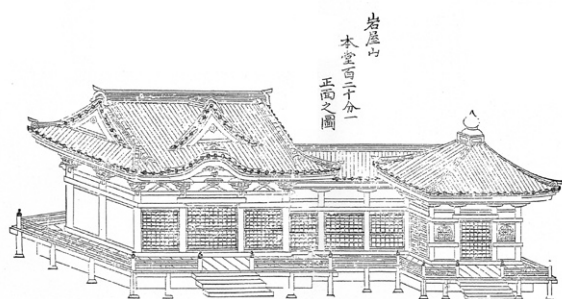
和 歌山県には歴史的建造物が数多く残されています。その多くは木造建物で、定期的な修理により維持されてきたものです。それ故、手が加えられた時代の技術や考え方を反映した改変が行われていることが少なくありません。文化財に指定された建物は、



後世の改造部分を取り除いた求聞持堂の屋根

その様な歴史も含め、現在に伝えられた姿で評価されています。

こ のため調査などにより、建物の過去の姿が判明し、ある時期の姿に復原することは、現状変更と呼ばれ、文化財専門家の審議を経て、文化庁の承認を受ける必要があります。



江戸時代後期の版木に描かれた本堂と求聞持堂

— 第 21 号の主な内容 —

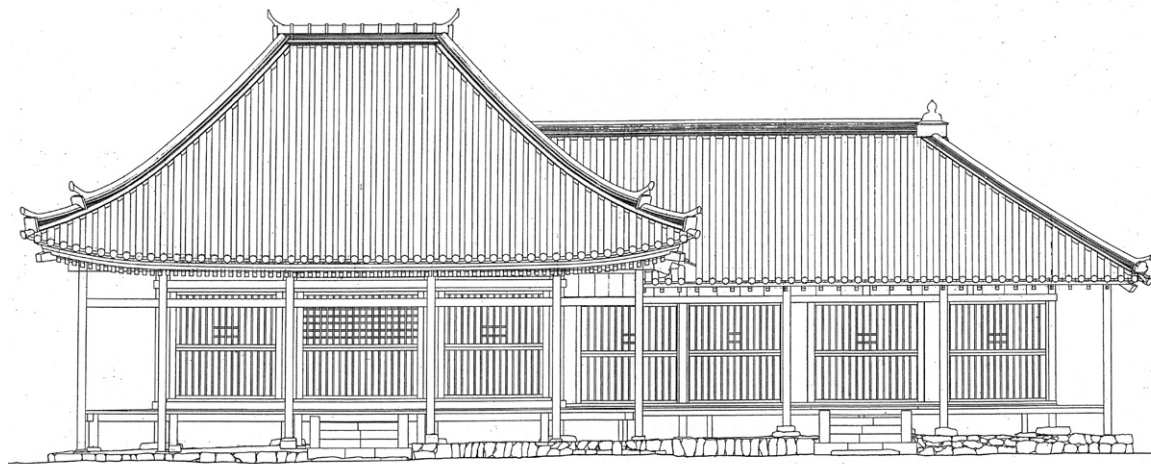
1. 連続特集 重要文化財福勝寺 その4
2. コラム 「古建築修理の散歩道」
野帳とは何か

福

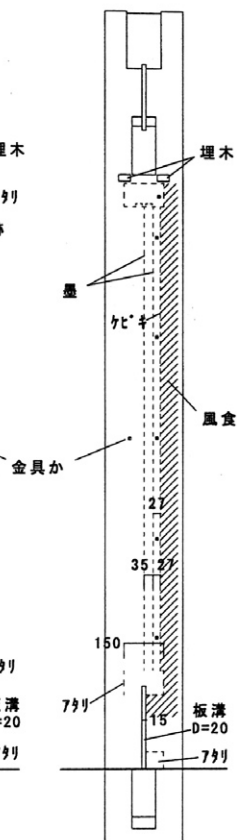
勝寺においても建物の解体工事に伴って詳細な調査を行い、各建物の修理や、改変の歴史が明らかとなりました。



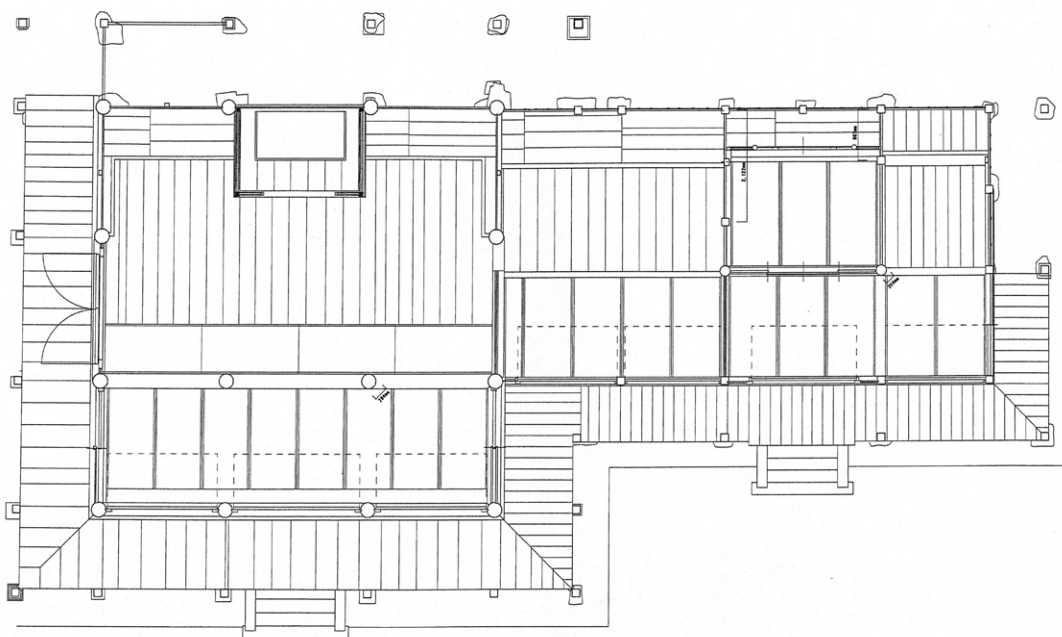
明治時代の古写真にみる改造前の求聞持堂屋根



修理前(現状)立面図



に残る境界の痕跡



修理前(現状)平面図



本

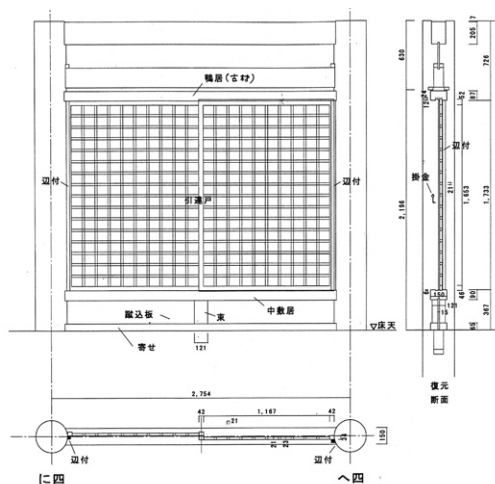
堂は室町時代後期(1500頃)の建立時には未完成のまま使われ始め、永禄十三年(1570)になって天井や外陣の壁、建具が整備されました。その後慶安三年(1650)に求聞持堂が建立された時に、本堂にも長押など化粧材が取り付けられ、ようやく外観の姿が整いました。

江

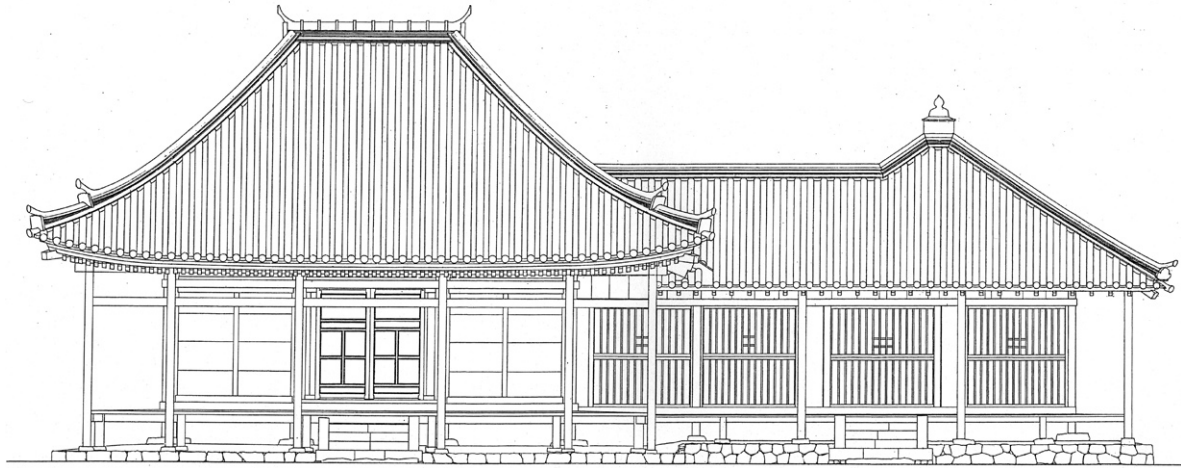
戸後期の文化年間には、中世密教仏堂の特徴である本堂内外陣境の結果が取り去られ、正面廻りの建具が本堂と求聞持堂で一連の意匠のものに取り替えられるなど、建物の使用れ方が変わってきたことが伺われます。また、大正八年(1919)には求聞持堂の各部屋の間仕切りが改変され、新たに仏壇などが設けられたほか、取り合い部の増床に伴い、屋根の形が変わりました。

各

建物のような変化は、修験の行場としての性格が色濃い本堂建立時。紀州藩



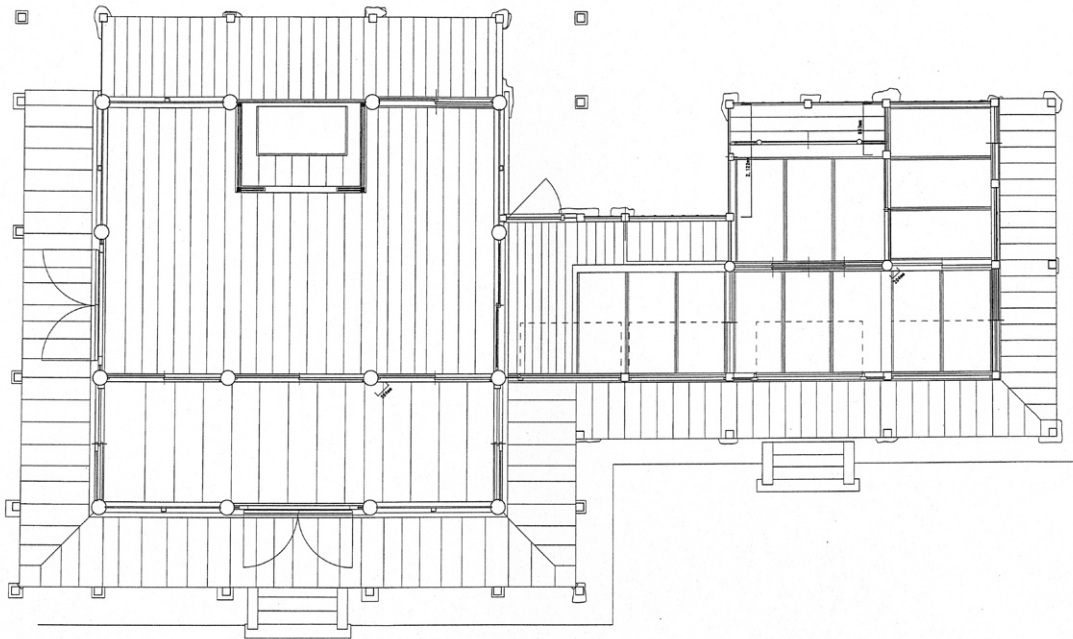
内外陣境の境界の復原図



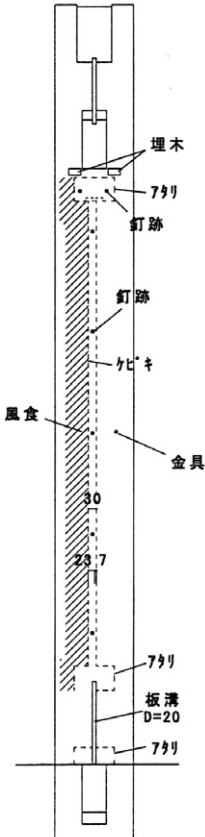
変更(復原)立面図



修理前(現状)の外観



変更(復原)平面図



内外陣境の柱に残る



現 在実施中の福勝寺本堂ほか2棟の保存修理事業は、平成十九年十二月の完成を目指しており、組み上げにむけて、いまは解体した古材の修理を順次進めています。

こ の復原により両脇間が板壁でふさがれる
 本堂の正面は、中央間に重厚な棧唐戸が
 復原され、修理前の葺戸の軽やかな印象とは大
 きく様子が変わります。また内外陣境の結界と
 して格子戸が復される内部は、柱や壁板に残る
 室町時代の墨書と相まって、中世仏堂の雰囲気
 をより濃密に醸し出すことでしょう。いっぽう
 求聞持堂は、方形屋根に復原され、かつてのよ
 うに、機能も、建物としても、本堂から独立す
 ることとなります。また、内部は間仕切りを復
 原しますので、祈祷に用いられた空間の構成が
 より鮮明になります。

今 回の修理事業においては、各建物が本来
 持っていた特徴を、最もよく表している
 江戸時代初期の姿に復することを目指し、現状
 変更の手續きをおこないません。昨年十一月に
 は文化庁より許可があり、復原計画と並行し修
 理工事を進めています。

主の祈祷所として求聞持堂が建てられた江戸
 時代初期。熊野参詣の宿泊所や「裏見の瀧」が
 ある名勝地として、貴人から庶民にまで親しま
 れた江戸後期。厄除けの名所として地元住民に
 よって守られてきた近代、と移り変わる福勝寺
 の歴史をよく映し出しています。

(多井 忠嗣)

野帳とは何か

歴史的建造物を修理または保存しようとする際、その建物について詳しく知る必要があります。どのような間取りや構造なのか。いつの時代に建てられたものなのかなどを、様々な資料から読み解いていきます。その際に資料の一つとなるのが野帳です。

元来^{やちよう}野帳とは、江戸時代の検地による控え帳のことであり、現地土地の測量にあわせて随時作成されていました。また、用件などを忘れないように、後の証拠として書いておくものでした。現場で作成する点や、控えであるという点、基礎的な資料となるという点が共通しています。

文化財調査の野帳はまず、A3またはB4判の1mm、3mm、5mm目の方眼紙に、ある程度の縮尺を決めて建物をスケッチしていきます。この際、たいてい目測かつフリーハンドです。断面線は濃く、見えがかりの線は薄くなどの強弱をつけたり、収まりを確認しながら描きます。スケッチにすぎないものですが、丁寧に描くことが大切です。その後、寸法を実測して書き入れていきます。特に必要と考える個所については、詳細図や文字によって補います。

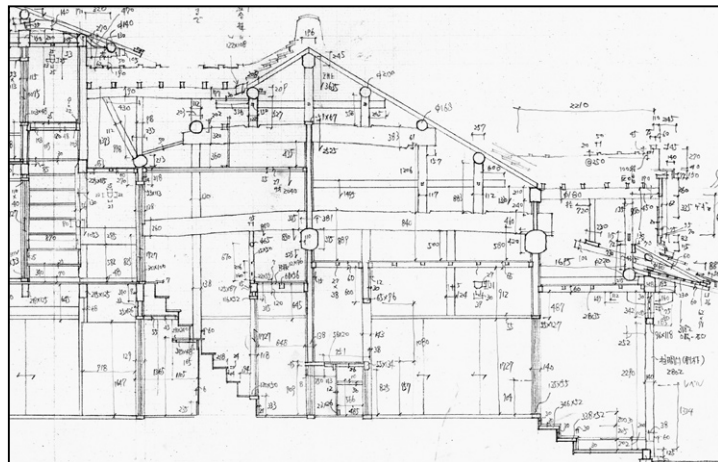
作業目的にもよりますが、建物を立体的に把握するために、数種類の野帳を作成します。主に平面図（間取り）、断面図（高さ、構造）、配置図（敷地形状、付属屋）、痕跡図（改造、転用）、架構図（小屋組）、立面図（外観）などがあります。（ ）内は図面作成の主な目的です。これらを基本資料として、復原作業や修理設計、修理計画などを進めていきます。そして、この野帳を整理し清書したものが、報告書に掲載されている保存図となります。

解体を伴う工事の場合、解体が進むに連れて明らかになる部分もあるため、調査は併行して行われます。そして野帳は建物全体から、構成する部材や装飾についても作成されます。

旧中筋家住宅の修理工事は5年目となり、多くの野帳が蓄積されています。これらは修理後に永久保存されます。現在は、瓦や金物を原寸で描く作業を行っています。また、解体が進んだ個所についての調査も常時行っています。

実測とは、建物を知る上で最も有効な手段です。現場を見て触れて、手を動かすことにより、気付くことや考えることがたくさんあります。野帳には、自然な曲線や濃淡など、手書きならではの味があり、描いた充実感があります。得られた情報をより多く残すこと、誰が見ても理解しやすいものであることが重要です。

（稲田 朋実）



旧中筋家住宅主屋の実測野帳の一例

風車 第21号

平成18年3月10日発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404 和歌山市湊571-1

tel. 073-433-3843

fax. 073-425-4595

e-mail maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>